

## 表現運動・ダンス活動の映像的記録の教育的 意義と授業活用とその背景に関する一考察

堀野三郎

(平成6年3月15日受理)

### A Study on Educational Significance of Video Recording in Expressive Movement and Dance Activities, and the Applications and the Background in Session

Saburo HORINO

(Received, March 15, 1994)

#### はじめに

本論は、標題に関して、概念的・実践的・理念的な三つの視点から検討し、論究する。前段では、標題中の用語に関する概念規定やその展望等についての考察を行った。

中段では、既に口頭発表した小論「舞踊表現授業時の小作品例」〈I〉(日本教育大学協会：保健体育・保健研究部門第9回全国創作舞踊研究発表会〈水戸大会〉水戸市国立婦人教育会館教官研究発表(VTR等による参加発表)会場発表資料1989)の要旨を具体的事象と対応した実態報告として解説形式で考察した。

更に後段では、中段で行った実態報告と関連して、その背景を成す教育舞踊の理念的な今日的課題に関する論考を行った。

#### I 表現運動・ダンス活動の映像的記録の教育的意義

先ず、本章の標題中の用語概念とその活用目標等に関して共通理解を得るために、筆者の定義的・展望的な事項について述べたい。

##### [1] 表現運動・ダンス活動の映像的記録について：

「表現運動」の用語は、現在のわが国では、一般的・教育制度的には小学校の体育授業時の表現的身体活動で用いられている。「ダンス」の用語は、同様な視点からは、中学・高校の体育授業時に用いられ、その他に、教育制度としての縦断的な視点から関連する用語と

しては、幼児教育（幼稚園・保育所）段階では「リズム遊び」の中の主要な身体表現活動の一つとして総称的に「リズム遊び」の語が用いられ、大学での体育実技授業では「舞踊；創作ダンス」等の語が用いられることが多いと思われる。

以上の用語等に共通的な質的概念としては、人が個人または集団として創作表現的身体活動を行うことを主体としていることである。また、小学校・中学校の義務教育段階での同種の活動としては、この他に、世界のフォークダンスや郷土の民踊等の学習活動も付加的に行われるのが一般である。更に、学校教育という枠を離れて表現活動・ダンス活動を展望すれば、前記以外の芸術的舞踊・娯楽的舞踊・民俗的舞踊、現代的舞踊・伝統的舞踊・前衛的舞踊等々の多くのジャンルに関する類似用語・関連用語等がみられるが、ここでは本論の論旨外故に、その詳細な吟味・分類等については割愛する。

本論でいう「映像的記録の対象となる舞踊分野」とは、主として幼稚園から大学までの教育的機関における身体による創作表現的ダンス活動としての授業時や関連的な部活動・クラブ活動等に関連する分野である。従って、その教育的意義の中核は、身体による創作表現的ダンス活動を知的に理解したり、実践的に活動したりする上で、その基礎や発展への参考や手助けとなる総ての映像手段による記録が活用の対象となり得る。

## 〔2〕映像的記録手段とその記録的意義について：

「映像とは、主として人間の視覚に訴える概念形象である」と規定するなら、それは「静的形象 static shape」と「動的イメージ dynamic shape」に分けることが出来る。

### 1 表現運動・ダンスに係わる静的形象記録に関して

歴史的・伝統的な手法としては、「略画法」「略（記）号法」「彫刻・彫像法」等があり、今日的な手法としては、「スライド；OHP等の投影法」等が一般的であるが、その他に、外見的には形象記述法ではあるが〈動きの時間的变化による動態的経緯を記録し身体各部位の同時多面的な立体的表出として精密・的確に、あるいは主旨抽出的に記録・再現できる方法〉として「運動・舞踊記譜法 movement and dance notation method」があり、各種のシステムが開発され、活用されているが、特に「ラバン記譜法 Labanotation；Kinetographie Laban；Motif Writing」は、広範な活用実績とシステム的な優位性でよく知られている。

「運動・舞踊記譜法」の記録的意義としては、その成果が、〈運動や舞踊の記録・分析・再現の3つの側面で活用できること〉にある。

### 2 表現運動・ダンスに係わる動的イメージ記録に関して

歴史的には、「回転ドラム等による走馬燈的映像投影法」が一部でみられたが、伝統的なオーソドックスな手法としては、「8ミリ；16ミリ；35ミリ等のフィルム映画法」（初期は、映像記録のみ、次第に映像・音声同時記録へ）が主流を占め、更に現代的な手法としては、「ビデオ（テープ）記録法；VTR」（以下「ビデオ」という）「コンピュータ・グラフィック法；CG法」等が今日盛んに用いられている。

ビデオやCG等のOA機器やパーソナル・コンピュータ等の近代科学的な機器を用いた手法は、記録・分析手段としての多くの優位性を含んでいるが、一般的には、前述の「運動・舞踊記譜法」に比して、再現手段としては、その活用領域において、現

時点では未だ及ばないことにも留意する必要がある。

本論では、上述の多くの記録手段の中で、「ビデオによる表現運動・ダンス活動をく記録・分析」手段の一面として、「観照と分析」に資する目的で活用し、本論の後半では、その実践例に関する検討・考察を行った。

本論で取り上げた実践例は、その殆どは長崎大学教育学部でのダンス授業時に学生達自身が自主的な創作表現活動をし作品発表をしたものからのビデオ映像的記録であり、それらを多年にわたり累積的に記録したビデオ・テープの中から抽出・編集して、観照教材として同学部学生に与え、その反応結果を検討し考察したものである。

なお、これらの記録対象以外にも、前述のように、教育舞踊 educational dance の充実・発展に資する芸術的・民俗的・娯乐的等々の作品・活動の記録の活用についても多くの意義と効用が存在することや、ビデオに記録するという記録手段自体が、ある学習者にとっては、現実的には、時間的視点からは出会うことのない先人の努力や、空間的視点からは触れ合うことの出来ない遠隔の地域間・社会間・国家間等での成果を相互に安価に容易に資料交流し、それらをビデオ・テープにシンクロナイズすることにより、時空を越えてお互いの共有財産として共に共感し、感動することが出来ることの素晴らしさや利点を内包していること等についても留意する必要がある。

そしてまた、このようなある種のソフト・ビデオ教材の開発の意義を考慮すれば、このようなビデオ制作そのものが、教科教育的視点からは、有為・有効な研究的・教育的実践領域の一つに位置するものであり、それが研究業績・実技業績を評価する上で、現時点までは、ともすれば評価されないままに欠落した部分の一つと思われることに関しても、体育実技やダンス実技の本質により密接に迫る研究・教育活動の一端として、再検討・再評価を要する課題の一つと思われる。

## II 表現運動授業時の学生等による小作品のビデオ観照例報告について

本論「はじめに」で述べたように、前章の主旨と経緯で編集した「表現運動授業時の小作品例ビデオ」を1989年に水戸市の国立婦人教育会館で行われた日本教育大学協会：保健体育・保健研究部門第9回全国創作舞踊研究発表会・教官研究発表会場で、発表者自身は同会場には出席することなく、VTRによる参加発表の形で、遠隔地（長崎）からの実践的な活動報告を行ったものである。以下に、その要旨を報告したい。

なお、このVTR報告の中核となるビデオ・テープの具体的内容そのものについては、本論のような紙面記述方式によっては、当然（遺憾ながら）不可能であること、および、それ故にこそ前論後尾に述べたようにソフト・ビデオ教材そのものの研究的・教育的価値観が重視されること、そして本ビデオを入手・観照したい読者のニーズに対しては、それは何時でも・何処でも・容易に実現可能であること等についても留意されたい。

### 【1】「表現運動授業時の小作品例」のVTRプログラムについて：

[総時間：29分30秒]

<0.35> 1. オープニング・タイトル

0.18 ○長崎大学教育学部〈初めイメージありき〉VTRレポート'89. 12. 6

～主に広がり・深さを求めて～

於・国立婦人教育会館（水戸市）

- 0.17 ○「表現運動授業時の小作品」〈1〉  
 〈指導・編集〉堀野三郎

<11.04> 2. 気軽に自分達のイメージを活かした小作品創り

～制限的課題での大グループ作品（4例）～

題名「公園の一日」；「公園にて」

〈実践は、変更可能な最小限の制約（ヒント）でトライ（スタート）する〉

……堀野指導メモ

- 0.21 ○紹介メモ・タイトル

- 2.31 (1) 「公園の一日」A } 長崎大学教育学部2年生  
 2.22 (2) 「公園の一日」B } ……2年小学校教員養成課程,  
 2.29 (3) 「公園の一日」C } 体育実技〈表現運動〉より。  
 2.27 (4) 「公園にて」……長崎大学公開講座 「美と健康のためのダンス教室」より。  
 ～モダンダンスを中心として  
 ジャズダンス, ジャズダンス等～  
 〈受講者……長崎市民（平均年齢……約45歳）〉

- 1.08 ○〈教師の予測（指導メモ）〉\*1〉……指導メモ・プリントより。

<16.46> 3. 誰にも身近な（アピール度の高い）ドラマティック・ダンス（3例）

- 0.25 ○ 紹介メモ・タイトル

- 5.05 (1) 「生物の進化」～プランクトンから人間へ、そして……～  
 (女子2人組)  
 2.32 (2) 「ハエトリ紙の苦悩」～Tango Version～ (男女2人組)  
 8.44 (3) 「夢」 (男子 ソロ)

<1.17> 4. エンディング・タイトル

- 0.12 ○ カラーバック

- 0.38 ○ [エピローグ]

踊りとは、多面的な内的感じを〈象徴化した動き〉のことである。

\*1〉:

4. 「公園にて」 — ジェット・ストリーム — より (1'28")

- ① 早朝の風景（樹木・柵・花壇・彫刻・噴水・ベンチ・水銀灯・遊具・門 etc.）, ② 管理人の閉門理人  
 ③ <A> 遊ぶ子供達（縄跳び; びらこ; フーリン; ぶらんこ; タッパ; 砂遊び; 三輪車; 鬼ごっこ etc.）  
 ④ <B> ベンチ・芝生などで（おしゃべり; 若者のデート; 主婦のヒール履き; 老人の日向ぼっこ; 猫の昼寝 etc.）  
 ⑤ <C> 溜掃係; 砂拾い; 噴水; 彫像 etc.  
 ⑥ 夕方の風景 ⑦ 管理人の閉門

①風景 8×4	②閉門 8	③<A> 8×4	④<B> 8×4	⑤<C> 8×4	⑥風景 8×4	⑦管理人の閉門 S 8×2 +4+(4)
------------	----------	-------------	-------------	-------------	------------	-------------------------

一般教育の場では、表現技術的な〈高さ〉を求めること以上に、  
表現内容的な〈広さ・深さ〉の開拓に重点を置いて、  
自他共に〈心の触れ合いを広め・深めて〉ゆきたい。 [堀野記]

## [2]「補足的なコメント」について：

これからご覧いただくVTRは、いずれも長崎大学教育学部〈表現運動〉授業時での活動の一部のご紹介です。従って、鑑賞に耐えない、目に余る欠点箇所も多々あることをお含みの上ご覧ください。

それと同時に、お互いの他大学間のこのような普段着のままの実情報告・交流、即ち、ビデオ・ライブラリー的な交流こそ、経費的にも比較的安価で、そして教育学部に関わる私達の中心的な課題の一つになるのではないかと思います。

今後とも、見栄を気にせず、気軽にお互いの指導上の問題点・困難点も含めて、ありのままの実情報告・交流の機会とその発展を希っています。

では、これから、このVTRをご覧頂く上でいくつかのご案内を申し上げます。

〈1〉 先ず、ご用とお急ぎのある方は、

2. 〈気軽に自分達のイメージを活かした〉小作品創り〈4例〉(11分4秒)のみをご覧下さい。

(1) 「公園の一日」Aでは、画面中央奥の男子2人組の銅像の西郷さん→尊徳さん→再び西郷さんと変わるのもお見逃しなく。

(2) 「公園の一日」Bでは、画面左手奥の男子による組体操形式の回旋塔のような表現のケースは男子ならではの立体的な表現の一例です。

(3) 「公園の一日」Cでは、画面・音ともに不安定で済みません。男子数の多い即興表現例として、酔っぱらい・いじめ・公衆トイレなども女子に見られない例のようです。

(4) 「公園にて」では、受講者の年齢(平均年齢約45歳)を反映して、演じるご本人はゴルフ・スイング、観る学生にはゲートボール・スイングとの評が多いこと、および、55歳男性の転がるボール表現の後半の変化、中央奥のかつてバレエ経験のある主婦の朝日・夕日の表現など、それぞれに年相応・経験相応の味わいも感じられるのではないのでしょうか。

なお、このイメージ課題設定の意図などについては、後で詳しくご案内します。

〈2〉 時間にもう少し余裕のある方は、上記の他に、

3. 〈誰にも身近な(アピール度の高い)〉ドラマティック・ダンス〈3例〉中、最後の「夢」(8分44秒)を加えて観て下さい。

なお、今回ドラマティック・ダンスのみをご覧頂く意図などについても、後でご案内します。

〈3〉では次に、これらドラマティック・ダンスとしての小作品(3例)毎のコメント(観

る方によっては、むしろ余分で耳障りな蛇足かも知れませんが)を以下のようにご案内します。

- (1) 「生物の進化」では、観る側の誰にも身近なイメージし易い題材をスケール大きく構想している点と、〈……人間へ、そして……〉の最終部分で人間社会のロボット化にふれている点(即ち、社会性を含んだ視点)が特徴的だと思われまます。

ただし、私の学生への要望コメントとしては、「その未来図は正義の味方のみか、むしろ、その便利さの反面として生活や思考の画一化・機械化の進行の危機感も併せて訴えた方が、今日的課題ではないのか。」と述べました。

皆さんは、どんなコメントをされますか。

- (2) 「ハエトリ紙の苦悩」では、前作ほどの構想的なスケールの広がりはありませんが、リリカルなお馴染みの名曲1曲のみを用いて、それをコミカルに仕立てて、一点集中的に、ユーモラスに切り込んだ切口のシャープさで、学生間で大受けした小作品です。

私の要望コメントとしては、「作品中間部の〈ハエトリ紙が、ハエにぶつかられて、ハエトリ紙自身、吾れと吾が身がくっつき合って苦しむシーン〉は、このままでもよく感じは出ているが、更に意欲的な展開の一案としては、両腕部位のみのくっつきよりも、例えば、左腕と右手首とのタッチ、そしてその状態をキープしながら右肘を左膝へタッチした状態なども加え、また解き離す苦勞・努力の表現以外にも、捕らえるべきハエにしてやられた悔しさなども併せ加えらるか、更に膝立てした左踵を使ってタンゴ調のステップを踏むなどすれば、一層中身が濃く(表現内容が広く・深く)なるのではないか。

また、最終部分の〈ハエの自爆シーン〉は、ハエが何故ハエトリ紙にぶつかって行くのかの意味が不明であり、例えば、それに到る必然性を持った一案としては、『私を捕らえようとしたハエトリ紙の奴が、私の一触れであんなにクチャクチャにくっついて苦勞しているではないか』との驕りと、『もっとカラカッテやろう』といった慢心の表現を加えてから、ハエトリ紙に突入し、自ら、身を滅ぼす結果を招く(自ら墓穴を掘る)といった風に、今一步の構想の煮詰めがあれば、観る者が更に納得できる作品になるのではないかと述べました。

- (3) 「夢」では、その構想経緯が、類似的な後述のようなひと流れで終始するのではなく、複層的・多元的に構成されている点が特徴的だと思われまます。即ち、一般に、「夢」に関連した題材例では、夢やひとときのまどろみの中で、楽しいオトギ話の世界や外国の珍しい土地・風物への歴訪・探検とか、怖い事件に巻き込まれ、恐ろしい人や物に追いかけて、絶体絶命の危機に瀕した瞬間、ハッと目覚めてやれやれとホッと一息をついてオシマイといった構想のケースが、従来どこでも多くみられるのに較べて、この作品では、就寝-夢の中でのダンスへの誘い(ダンス下手からダンス上手へと、その転換がグッド)-楽しいひととき-壁(包囲・圧縮……この一連の追込み方は、特に秀逸)-絶体絶命のピンチといった前述の一般的な経緯でオシマイとはならず、更に脱出の地下坑を掘り進み、ようやく地上脱出でヤレヤレと思ったのも束の間、次第に脚が、腕が、

全身がギクシャク、ガチガチに凍てつくように固まって行き、心焦れど体動かずの金縛り状態のままジタバタとうなされ、輾転反側する内に目覚め、冷汗を拭い、「アア、これが夢で助かった！」と、座位で両腕を左右一杯に拡げて、安堵感・解放感に浸った背伸びのポーズ（このポーズは、この作品の出だし部分で行った眠気が来ての背伸びポーズと対応しており、様式的な整合性がみられてグッド）をしてオシマイ。ということで、部分的なマイナス面としては、使用している音楽の歌詞の視覚的翻訳化のような箇所・やや冗長な動き（楽しく踊り回るシーン）等も観られますが、総じて、多様な場面設定と動きとマイムをミックスした自然流で多彩な表現技能も伴って、アマチュア作品としては、十分鑑賞に耐える作品（出色の出来）になっているのではないかと思います。

このような同一題材の重層的（複眼的・複層的・多元的）な捉え方・感じ方は、教育舞踊における発展的な発想・構想創りの上で重要な課題の一つではないかと思います。

以上、各作品ともに全体的な完成度においては、未だ一步も二歩も未完の作品ばかりですが、それぞれ何処かには彼ら・彼女ら固有の思いや努力の跡が窺える点でご了承下さい。

なお、前記の二作は、平成元年度前期の発表作品であり、最後の「夢」は、それよりも約10年前の発表作品であり、10年の時間的な隔たりを越えて、当時としては未来的な今の受講学生がVTRを通して、現在もなお今日的に有効な作品例として当時の彼ら・彼女らの情熱やセンスをストレートに受容し、参考に出来るというのは、とても素晴らしいことだと思います。

今後、このような新旧ドッキングによる、学生にとっては身近な参考作品として鑑賞・観照できる機会は、単に一大学内での恩恵に止まらず、今回のような企画\*2)を通して、全国的な規模で、更にまた時空を越えて、国際的な視野の中で、ビデオ・ライブラリーの安価で、かつ気楽に実現可能な有効情報の交換システムの一つとして定着し、更に発展することを希い、今後とも、お互いに頑張っていきたいと思います。

### III 表現運動・ダンス活動の今日的な背景と課題

前章と関連して、一般教育における多面的な教育舞踊としての表現運動・ダンス活動の主として学習者各自の自律的な創作表現活動を重視する立場から、本章では、その教育舞踊の理念的な背景と今日的な課題について論考を行った。

#### [1] 前記II-[1]-2.の制限的課題での大グループによる小作品創りのイメージ課題の設定の意図などについて、以下のように考えました。

- 1 このイメージ課題「公園の一日」；「公園にて」の実施概要について：  
この課題は、本学部では授業回数の中間点をすぎた位の進捗時(表現運動のみ前期・

\* 2)：日本教育大学協会：保健体育・保健研究部門の全国創作舞踊研究発表会は、1993年現在で13回の同発表会を実施してきたが、その中で、1989年（平成元年）の時点で、当初、筆者自身が企画提案して来た意向等を反映して、〈教官研究発表会の中にVTRによる参加発表形式〉の企画が初めて導入・実施され、その後、この企画は絶えることなく継続的に現在まで実施されて、多くの成果を累積している。

後期の約半年間を通して開講；1コマ2時間30分授業・13-15回中の約8回前後）に、教師掲示によるスロー・テンポで短時間（1'28"）の伴奏音楽（全体の時間数も提示）と、受講者の自律的なイメージやアイデアによって自由に変更可能な規制の緩い表現構想の提示を伴って、1コマ時間内を更に細分・限定して35-45分間の1時間完結型の即興創作活動による小作品創りとして採り上げ、40名前後のクラスを二分した大グループ（この課題では、100人以上のマス・グループの場合でも実施可能です。）による各小グループとしてのイメージやアイデアの多様さと、それらが全体として作品的なまとまりを表現していることの面白さ等を期待して、ここ数年来、毎度実施しているものです。

私が、この課題を採用するようになった動機や前述以外の観点・留意点の主なものは、次の諸点です。

- (1) 毎年同授業終了後、学生提出のレポート内で「本授業を受講して、特に印象に残った活動・作品等について」の記入項目中、この課題に関する高い関心度・満足度が毎回可成り見られること。

その理由としては、次の諸点が考えられます。

- ① 原則的には、自分達の表現したい発想・運動構成・運動技術等に従って、自律的に自由に活動して良いこと。
- ② アップ・テンポの曲よりも、スロー・テンポの曲を用いることによって、演者が内観しながら即興表現をしたり感情を込めた表現が可能であること。
- ③ 短時間完結型の課題が、演者にとって集中的な完成感・充実感（一気に創り上げた歓び・感動など）を高める上で有効であること。

これに関する私自身の経験的な判断としては、（勿論、基本的には表現内容・技能上の要求度〈期待するレベルの如何〉で大いに相違する訳ですが）本学部での殆ど創作的ダンス経験ゼロに近い男子学生も含む現在の初心者レベル対象の授業展開にあっては、前述のようにスロー・テンポの伴奏音楽で1分30秒前後位の小作品創りが〈短すぎず長すぎず、ちょっとした工夫・努力を経て、完成・到達し、満足度が味わえる〉等の意味で有効な場合が多く、2分以上の作品創りの場合は、1時間完結型授業としては、時間不足で内容低下の傾向（例えば、発想・構想等の独自の広がりや深さに欠け、動きの開発・展開もワン・パターンに陥り易い傾向）が多く見られます。従って、このような場合は、2-3時間完結の課題として、指導者としては、何よりも先ず学習者の自律的活動感の充実を第一にと、先を急ぐことを自戒・留意して進めています。

皆さんのところでは如何でしょうか？

- ④ 前述の①-③の要望に応える前提として、前述のような活動が可能なイメージ課題の選択・伴奏音楽の選択および作品の長さ・呼間数の検討等は、事前作業として多くの時間・エネルギーを要するものであり、その段階までは教師中心に本時の活動以前に検討・準備し、本番の授業時には、制限的課題として料理の材料は既用意されているので、学生達はこの課題のコア活動へと早速に・ストレートに自分好みの味付け・イメージ化に突入し、創作料理と同様に創る活動自体へ集中的に没頭



できること。

- ⑤ 自分達の作品の出来映えについて、自分達グループ内での半内観的な中間チェック、次に発表時での相手グループからの客観的な批評チェック、そして更にVTR録画・再生時での教師コメント付きの総括的なチェックといった三段階のチェックを原則として実施して、学生達にとって複数の推敲経験やイメージの定着化を図るように留意していること。

即ち、本学部のグループ創作の場合、

第一段階として、各グループ毎にリーダー1名、サブ・リーダー1名の2名が全体を客観視する意味で、チェック時にはグループ外に出て、グループとして一応全体的なデザインがざっと出来た段階に一度と、後半の創り込み段階での最終チェックとしてもう一度の2回を原則として、グループ全体と各グループ間との空間配置・高さ・向き・テンポ等の相互対応・変化（多様と統一の視点）を中心としてグループ内での中間発表・手直し・再トライを行います。

第二段階として、作品発表と観照の形で代表コメンテーター3-4人により「どんな処が良かった・面白かった、どんな処をどんな風に変えると・加えるともっと良くなるのでは……」〈褒めてから助言・注意・提案〉を原則に、相互評価・自己確認的な心の交流・意見交換を行います。

最後に第三段階として、ビデオ画面を観ながら、教師の総括的評価や今後の展開への留意点等を部分的な師範・実演を交えて行い、学習者自身の自己客観視や自己確認、集団的な表現効果、相互の個性認識・反省等を通して次回への努力目標等を定着できるようにと希っている訳です。

勿論、創作活動の全ての課題についてVTR録画・再生ということは時間的・労力的にも無理な話なので、各期毎それぞれに異質的な課題に関して約3-4回程度で学生の創作活動のビデオ撮り・再生コメント・客観視等の機会を持つようにしています。

- (2) 私自身が、ラバン・アート・オブ・ムーブメント・センター（以下「ラバン・センター」という）の授業時や同センター主催のサマー・コース等に参加・体験した「動きのコーラス」のアイディアを、より日本の教育的実情にマッチするようにアレンジして活用したいと思ったこと。

では、何故日本的なアレンジメントの必要性を感じたかということ、その動機や理由は、以下の諸点からです。

- ① 私が参加した1973-'74年度の当時のラバン・センターでは、1コマが1時間15分授業を原則として、ティー・タイムを挟んで再び後半も再度1時間15分継続の授業も多い中で（即ち、1コマが1時間15分授業または2時間30分授業の形態で）、皆さんご承知のラバン・システムを中心とした授業展開がなされたこと。
- ② 次に、ラバンの教育舞踊理念の実践について、同センターの方法論（教育としてのダンスの扱い方）自体に、日本の教育の現状に照らして、矛盾が感じられたこと。

即ち、'75年に同センターは、Surrey州のAddlestonからLondon市内にある本拠地のLondon University Goldsmith' Collegeへ移転するのを契機として、従来、同センターが、全ヨーロッパにおける教育舞踊のメッカ的な存在としての役割を担ってきた

ところの Educational Dance Course を中核とする路線の他に、新たに Dance Theatre Department としての Professional Dance Course を新設し、今日に至っているが、このニュー・ウェーブへの対応・必要性もあつてか、かつて、ラバンが1948年に「現代教育舞踊 Modern Educational Dance」を初出版して以来、教育舞踊指導のバイブルとも称され、ダンス学習者の自律的な内的個性・創意工夫を尊重した人間教育としての舞踊教育理念を主眼に、その具体的方法論として、ご承知の16の基礎的動きのテーマを循環前進的・系統的に設定した同システムにあつて、殊にその理念的的精神性に対して関係者に高く評価されてきた同センターの動向は、'73年当時、既にその精神性は薄れ、技術志向的な風潮も多々見られ、私自身にとっては、半分学習、半分失意の間にあつての1年間を過ごして来た訳です。

(その間の事情を、私は既に1975年の女子体育2月号に報告した「イギリスのダンス教育」〈五、イギリスのダンス教育についての感想〉<sup>1)</sup>の中で、

「……(3)同センターの授業内容は、表現内容からのアプローチよりも、身体運動構成からのアプローチが量的に多くみられた。即ち、その多くは、情感を伴った身体運動の表現として、如何に運動構成を行うかが中心的な課題であり、そのための基礎と発展的な身体訓練を経て、それらの概念の活用による課題的運動創作や、自主的自由創作などが一般的であった。換言すれば、教育舞踊の展開というよりも、舞踊専門教育的手法が中心であった。……」と述べ、その動向に対して憂慮を表明してきたこと。

そして、1990年現在での「松本式課題学習法」<sup>4)</sup>の現状が如何に前述の自体と近似の状態にあるかは明白であると思います。)

- ③ イギリス、西ドイツ等は、体育行政制度として、学校教育としての体育は、同一教師がボール運動も、器械運動も、体操も、ダンスも総てにわたって担当・実施する義務も必要もないのが一般的と思われること。および地理的にも長い冬を屋内運動施設で過ごさざるを得ない条件下での身体鍛練の志向が見られること。それはまた、前記の運動領域そのものについても、その全てを実施するのではなく、その領域内で、その学校として力点を置いて採用した種目を中心に、それに対応した専門的指導者を迎えての授業が展開される現状にあつては、どうしても舞踊専門的な技術レベル志向が尊重されたり、要求され易い素地を持っていることは否めない事実であり、また、歴史的な経緯から見ても、モデルネ・タンツからモダンダンス＝創作的なダンスへの教育舞踊の流れの中で、その発祥の国と目されるドイツは、前述の気候風土・教育制度等の日本と異なる条件と共に、伝統的に鍛練的な体育活動が遵守・尊重されてきた歴史を有し、各運動領域の展開志向においても、その影響は、可成り大きいと思われること。
- ④ 以上の教育舞踊における先進的な国での背景や現状に比して、わが国の現状は、一般教育としての表現運動・ダンス授業は、通常1コマが40-50分(実質の活動時間は35-45分前後)と短時間であること。これらの授業担当者は、全教科担当者や体育教師の原則としては全運動領域の指導を担当しなければならない舞踊専門的指導志向には当然より大きな限界と無理があり、かつ、その受け皿としての児童生徒に関しても専門的技術の習得・発展は、各個人のダンス的な経験や資質にまつべき二義的な事項であり、

〔「初めイメージありき」〕で、児童生徒の自律的なイメージを大切にし、そのイメージから動きへの彼ら自身の問題解決学習的な試行錯誤を経て後、仲間同志の助言や教師からの内容にマッチした動きの展開ヒント等の指導助言を得て、再度試行・開発・決定することにより初めてイメージと動きとが自分自身のものとして定着するといった手順〕即ち、《創り踊る・観る・創り込む・観る・そして次は》を原則に、表現内容的な広さ・深さを求め、自他共に心の触れ合いを広め、深めてゆくことにより、創造的な人間性やより豊かな人間性の開発・発展を求めていくこと（堀野案）<sup>2),3),4)</sup>は、現制度にあっても、十分に実現可能にして有効な方向といえること。

**[2]最後に、前記II-[1]-3.の自由課題での小グループによる作品例として、今回ドラマティック・ダンスのみをご覧頂く意図等について、以下のようにご案内致します。**

- 1 特に一般教育での児童生徒にとって、創る立場、観る立場とも身近な題材・動きのヒント内での展開材料が豊富で、表現化し易く、感受し易いこと。

即ち、私自身が保有する過去約20年間の学生ダンス作品のVTR収録作品は、約100作品位になるが、その収録基準としては、何れも ①各年度や各期内で授業終了後〈特に印象に残った作品等〉の学生への質問項目に対して、学生側から特にアピール度が高かった作品 ②教師からみて、たとえ未完成部分が多くても発想・構想・内容構成・運動構成・運動創作等の視点から有為な参考・示唆に富んでいると思われる作品の二つの観点から、各期1授業当り2-3作位に厳選して収録したのですが、今回その中から特選したものの32作品を精選し、その作業終了後、結果論的にその傾向を振り返って観察した結果、約2例の抽象的表現傾向の作品(ラバン・センターでは、pure danceと称して、動きのtechniqueとcompositionを主調とするdance work)を除き、その殆どは具象的でドラマ的やマイム的な傾向の作品が多く、次いで、具象的でリリカルな作品が多かった。ただし、このリスト・アップに当たっては、日常生活行動そのものの表現を主調とする作品や、それに近いアクションやジェスチャーのみに終始していると思われる作品は、総て除外し、たとえこれらのヒントから生起していても、それらを自分や自分達が特に訴えたいところの表現意図に従って、象徴化が成されていると感ぜられる作品のみとした結果が、誰にも身近なドラマティック・ダンスとなった訳です。

- 2 前項の結果は、一般教育でのダンス学習者にとって、イメージ課題からのアプローチは、単に舞踊経験初心者の小学生段階を中心としたものに限定するものでなく、中学生・高校生、更には大学生にとっても、初めに各自固有の自律的なイメージを持ち、一般的には、第一に日常生活活動や身近な事象からスタートし、それをディフォルメするといった手法や流れは、創り手にとっても観る人にとっても身近に伝達・共感し易い方法の一つとして、表現運動・ダンスの原点をなすことを示すものです。
- 3 前記の[VTRプログラム]最後の〈エピローグ〉の中で、〈内的感じ〉に関して、創り手の自律的な感覚・感情・思念・思想といった順で題材の表現質が、量的に展開されるケースが本学部では多いようです。この題材傾向は、初心段階からダンス経験の進んだ段階へと進む課程にあってもほぼ同傾向を示すようです。各地・各年代・各学習メンバーによっては勿論他の順列や傾向を示すことも多いと思いますが、少なく

とも思想的な表現内容例よりも、感情的な表現内容例が多いのは事実ではないでしょうか。その意味では、日頃不用意に用いることの多い〈思想・感情の表現〉は〈感情・思想の表現〉と、あるいは、〈感情・思念の表現〉と用いる方が、より現実的傾向の反映として妥当性が高いと思われます。

- 4 最後に、再び「初めイメージありき」が表現運動・ダンスの鉄則であることを強調したいと思います。

即ち、一般教育としての教育舞踊にあつては、世代・年代の如何に関わらず、運動課題からの導入による一部例外的な参考事例としての効用性を除き、原則的には、イメージ課題から導入・出発すべきであると確信します。

### 参考文献

- 1) 堀野三郎, 「イギリスにおけるダンス教育」女子体育, 女子体育連盟, 17-2, 1975. P. 22
- 2) 堀野三郎, 「ダンス指導の根底は何か」体育科教育, 大修館, 27-7, 1979. pp14-16
- 3) 堀野三郎, 「研究協議: 高校の部〈ダンス〉への指導助言  
女子体育, 女医体育連盟, 29-3, 1987. p36
- 4) 堀野三郎, 「教育舞踊における今日的な中心課題について」〈その1〉  
～松本式舞踊課題学習法に関するくまると体験・  
運動課題・極限的動き〉の再検討を中心として～

長崎大学教育学部教科教育研究報告,  
長崎大学教育学部, 14, 1990